



企業編



くにみ農産加工 有限会社

国見町榎来214の14番地 設立 昭和56年11月 従業員 75名

くにみ農産加工 有限会社は、全国的に農業が衰退していく中で、国見町の主

産業である農業を支えるために、国見町とキユーピー株式会社などの企業や地元の農業をする人も株主に加わり第三セクターとして誕生しました。

くにみ農産加工は、イチゴ、ホウレン草、玉ねぎ、人参などの冷凍加工業から始まりました。「良い製品はよい原料から」「地域ととも」という基本方針のもと、ドレッシング用白ネギの加工、冷凍ピラフ製造と業務を拡大していきました。



▲パソコンで情報確認している 藤本一男さん

そして、今までの基本方針に、「かけがえのない存在になるために」を加え、国東に住む自分たちにできることは何かを考え、トウガラシやバジルなど手間がかかるが単収入が高い農産物を栽培することにしました。特にバジルは、他の作物よりも単収入が高いので、非常に力を入れており、日本一の生産量を誇るようになりました。そして、現在のくにみ農産加工では、生産量日本一に加え、品質世界一を目指しています。そのため、栽培情報を共有化することが必要です。消費税軽減措置等支援情報システム開発事業費補助金を使い、2014年に栽培情報のクラウドシステムを導入しました。このシステムにより、バジル農家同士の情報交換、くにみ農産加工からの情報提供が簡単にできるようになりました。

現在、これまで国東半島の食材を扱ってきた経験を活かし、7月下旬にオープンする「おおいた国東半島アンテナショップ」の目玉商品「国東の特産品を使ったイタリアンジェラート」の商品開発に協力しており、ジェラートに合う国東半島の食材の発掘を行っています。

▼ジェラートの商品開発



▼バジル農家への家庭訪問



くにみ農産加工からの情報提供が簡単にできるようになりました。

認定 農業者編



前後 泉さん さよ子さん

国見町岐部 平成10年3月からご夫婦で始める。

前後泉さんは、もともと農業協同組合に勤めながらお米や生シイタケの生産を行っていたが、45歳のときに退職して専業農家になりました。

前後さんの住む上岐部地区は、イチゴのハウス栽培をする人が多くおり、前後さんも園芸振興総合対策事業を使って平成10年3月にビニールハウスを2棟建て、奥さんと2人でイチゴを栽培することにしました。しかし、平成10年の台風で、ビニールハウスが壊れてしまい、植えたいばかりのイチゴが大きな被害を受けました。そんな危機を乗り越えた2人に転機が訪れたのは、国見町役場産業課の勧めもあり、平成14年の「ほとけの里産直部会」の設立にかかわったことでした。まず、産直部会のメンバーとして

▼奥さん手作りのイチゴジャム



も作業をしているので、旅行とか行ったこともないが、いつも2人で一緒にハウスにいることが何よりも幸せ」と話していました。

て、東京首都圏にスナックエンドウを出荷しました。続いて、同メンバーで中津にある生協の店舗に野菜を卸しました。この経験により、自分たちの作ったものを消費者に直接売る「産直」の魅力に気づき始めました。その後、道の駅にみなど直売所に農作物を卸すことを続けるうちに、今では50種類の農産物を栽培するようになりました。



▲スーパーあおきに出荷している様子



今年11月に功土さんが結婚を控えており、将来は、功土さんのお子さんを含めた3世代で漁にできることも夢見ています。



▲タコつぼ漁の準備をしている様子

とが理由でした。 こうして始めた家族3人の潜水漁ですが、漁場までは人に借りた船で行き、海に潜るための酸素は、国東町富来浦の漁師さんのところで補給する状態でした。それから、2年後には念願の自分たちの船を手に入れ、徐々に漁に必要な道具を揃えていき、今では、船外機2艇、漁船2艇を持つまでになりました。 そして、今年からタコつぼ漁に挑戦します。これは、息子さんの功土さんがこれからも漁業を続けていく中で、もっと上を目指して行きたいという考えを家族に示した結果でした。基さんは「何もないところから一緒に始めたから、息子には苦労をかけた。しかし、あの何もない状態を知っている息子だから、これからも何とか漁業を続けて行けると思っているし、漁の設備投資ができる」、功土さんは「潜水漁は、ここ8年平均的な漁獲量で推移しているから、別にこのまま続けていても問題はなかった。しかし、やり方次第で漁業の可能性は無限に広がると信じているので、新しいことに挑戦したかった」。そして、有美子さんは「海の上でよく親子で会話をしているの、お互いのことがよく分かっていきます。だから、これからは大丈夫です」と話してくれました。

林業・水産業編



川島 基さん 有美子さん、功土さん

武蔵町古市 平成11年からご家族で始める。

が、息子さんの功土さんが高校卒業を機に漁師になると決意したこと、10年前にお兄さんから独立して家族3人で漁業をすることになりました。

しかし、漁業を始めようとした時、漁をする船も道具も所有していませんでした。そんな3人が選んだのが、潜水漁です。漁をするのに道具が少なくても良いこと、また武蔵漁協で当時潜水漁をする人がいなかったため他の人と競合せず、漁獲量が安定するこ

